

## 12. ジュエリー4 ～夢・やさしさ・勇気・友情さがし～

敦賀市立咸新小学校

6年 橋本 のぞみ



各務原市立緑苑小学校

6年 石原 弓子

永森 美香子

小林 来美

澤村 弥生

松浦 恭奈

稲本 皓己

「今日はつかれたね。ティナ」

私たちはおしゃべりしながら帰る途中。

すると、

ガサガサッ。

草むらの方から音がして、誰かがいるようです。

「はあ、草むらは、葉っぱまみれで嫌になるわ」

つえを持った女の子が出てきました。何だかふつうじゃなさそう。かみ型も服も不思議な格好をしています。

「あなたは誰？」

「私はジュエル。魔法使いなの」

「魔、魔法使い～？ 本当に？」

私たちは信じられないという顔でジュエルを見つめるけれど、ジュエルは少しも気にせず、

「あなた達は？ 名前を教えて」

「私はティナ。十二才」

「私はアクア。私も十二才」

「ティナとアクアね。分かったわ」

「じゃあ私たち、そろそろ帰るね」

「ちょっと待って！ あの……力を貸してほしいの」

ジュエルの真剣な様子に、放っておけない私。

「じゃあ、私の家で話を聞くから来て！」

そして私たちは、足早に私の家に帰ります。

「ただいま！」

「何？ ただいまって！ 呪文？ どんな魔法？」

「……ちがうから」

するとドアが開いてお母さんが出てきました。

「ティナ、おかえり。あら、アクアちゃんも一緒？ ん？ あなたは？」

お母さんは、ジュエルの方に目をやりました。

「あっ！ この子はジュエル！ となり町の子！」

私はあせって、そうごまかしました。

「友だちね！ お上がり！」

お母さんは、本当に友達と思っているみたい。

「早く私の部屋に行きましょ！」

部屋に入って、アクアが聞きました。

「力を貸してほしいことって何？」

「実は私、魔法使いの都を作るために必要な宝石『マジカルジュエリー』を探しに来たの。一個はさっき、草むらで見つけたのよ」

そう言って、青く輝くものを取り出しました。

「わあキレイ！ 何これ！」

「マジカルジュエリーの一つで、大きな夢という意味がこめられている『ドリームサファイア』。ジュエリーはあと三つ必要なの」

「私たちに一緒に探してほしいの？」

「そう！ 協力して！ 三人一緒なら出来るわ！」

私とアクアは目を合わせて、

「よし！ 協力する！」

そう言った次のしゅん間、周りの景色が変わっていました。

「こわいよ！ 降ろして！」

私たちはジュエルの魔法のほうきに乗って、空を飛んでいたのです。ジュエルは早速マジカルジュエリーを探しに行くつもり。

「あの森へ行こう。飛ばすからつかまって！」

ビューンゴゴゴーーー！

「きゃああっ！ 落ちるー！ 助けてー！」

「さあ、森に着いたわ」

私たちは一気に疲れたけど、森の中を歩いていきました。おくの方まで行くと、私たちがぱっと照らすものがありました。金色に光る雲です。

「金色の雲まで行くわ！ ほうきに乗って！」

私とアクアはほうきに乗ろうとしました。

「無理だわ。ほうきの充電が切れてる」

「充電式！？」

いきなりピンチ！ でもジュエルは落ち着いて、

「じゃあ、変身魔法を使うわ！ マジカル☆ミラクル☆ジュエルチェンジ！」

光から出てきたのは、ピピッ、小さなひよこ。

「もしや失敗？ ダメじゃん！」

「だって私、新米っぴ！」

「じゃあ！ もう一回やって！」

「マジカル☆ミラクル☆ジュエルチェンジ！」

大きな鳥が目の前に！ 百人乗っても大丈夫そう。

私たちは、金色の雲にたどり着きました。そして、空洞を見つけました。こわいけど、私たちはその中に入っていました。

「結構迷うね。行き止まりにコウモリが！」

「こういうのって、迷宮って言うんでしょ」

(……迷宮ではないと思う)

やっと出口に着いてほっとした時、

「ああっ！」

「何？ ジュエル」

ふり返ると、そこには温かな緑色に輝く宝石が。

「間ちがない！ これは『ナチュラルエメラルド』！ やさしさの意味がこめられているの。あっ、でも金色の雲が消える前に、帰らないと！」

「ほうきの充電は？」

「大丈夫よ。任せて！」

この時、ジュエルが頼もしく思え、三人のきずなが少しだけ深まったような気がしました。

大きな夢の『ドリームサファイア』と、やさしさの『ナチュラルエメラルド』が見つかり、残るジュエリーはあと二つ。まだ波乱が三人を待ちかまえているのでした。★

金色の雲が消える前に、帰ることができた三人はひと安心。

「あ……危なかったあ。そうだ！ 残りのジュエリーの名前とか分かるの？ 分かれば手がかりになりそうだよ。ね、ジュエル」

「名前は分からない。色で覚えてるから。あとは、赤と黄色なんだ」

その話を聞いたティナとアクアは、宝探しのようで楽しくなってきました。

「さあ、ほうきに乘って！」

「うん！」

と声を合わせて答えた二人。三人は海までもうダッシュ！ 海に着くと私とアクアは、もうへとへと……。ジュエルはへいきでした。

すると、海ぞいに赤く光ったものが！ あれはきっと！

「あそこに赤いジュエリーがあるよ！」

「あ！ 本当だ！ あれは、勇気という意味がこめられているの！」

(あんがい楽だね) と思って手にとると、つるん！！ と手からジュエリーがにげていくように海に落ちちゃった！

「あ！ 手がすべった！」

海に落ちたジュエリーをどうやって取るのだろうか……。

「もー、ジュエル！ あとちょっとだったのに……」

「ごめん！ こういう時は……マジカル☆ミラクル☆ジュエルチェンジ！」

今度も成功！ 大きなイルカにへんし〜ん！

「みんな、魔法で息が出来るから、つかまって！」

蒼くキレイな海……。赤く輝くジュエリーは……？

「あった！ あそこだよ！ キレー」

「勇気の『ファイタールビー』……。なんだか、勇気がわいてくる感じ……。これで残るは一つ……。」

その時！ 大きな生き物がもうスピードで！

あれは……サメ……。

「キャー」

私たちは波に押し出され、どこか……遠くへ……飛ばされて行きました。

「こ、ここは？ まっくらだよ……。少ししか見えない。ティナ、アクア、大丈夫？」

「大丈夫だよ。でも、これじゃあここから出られないよ……」

そこに青いローブを着た人が現れて……。

「出たければついてくるが良い……」

三人は話し合いました。

「きっと良い人だから、ついていった方がいいよ」

「でも、悪い人だったらどうするの？」

ティナだけ反対しましたが、

「大丈夫だから行こうよ」

結局、三人はついて行くことにしました。

「ついて来たけど……出れる気配ないね……」

「出れないのかなあ」

三人は出られないのかもしれないと考えたりして、すごく不安になりました。

「だからついてこなければ良かったのに」

「しょうがないじゃん。ついて来ちゃったんだし！」

「でも、もうちょっとしたら出れるかもしれないよ！」

三人はケンカをしました。

すると……、出口らしい所が見つかりました。

「あそこ、出口かもしれない！」

ティナが走って行ってしまいました。

「ちょっと、勝手に走って行かないでよ！」

私がおこりながら言った時、

「キャ〜！」

とティナの叫び声でしたので、私とジュエルは急いで走って行きました。するとティナが倒れていました。

「この子には悪いが、ねむってもらったよ」

それはあの青いローブを着たひとでした。

「なんですって、許せない！」

と私が言うと、ジュエルがいきなり

「マジカル☆ミラクル☆ジュエルチェンジ！」

そう言ったしゅん間、私たち三人は大きなねこにへんし〜ん！ ティナはねているので、二人で戦うことにしました。私たちは、青いローブを着た人にかみつきました。その人のポケットに、赤く輝くものが……。

「これはまちがいなくジュエリーよ！」

「なんで？ なんで『ファイタールビー』がここにあるの？」

私はびっくりして青いローブを着た人をじっと見つめました。青いローブを着た人は、

「なになって、この子からとっただけだよ」

と言いました。その時、ティナが目を覚ましたので、私たちは三人で青いローブを着た人とたたかいました。

私たちは青いローブを着た人に勝って、『ファイタールビー』をとりもどすと出口にきました。

「フー、やっと出れたー」

「あと一つだね」

私とティナが話していると、

「さあ、あと一つ探しにいくよ」

ジュエルがほうきにまたがって言った。砂ばくの上を飛んでいると下に黄色く光る物が、

「あれって、何。砂でよく見えないよ」

ティナが言うと、

「あれは、まちがいなくジュエリーよ」

私はさげびました。

私たちはジュエリーの近くにおりました。四つ目のジュエリーは大きな貝の中に入っていました。二人で落ち込んでいると、ジュエルが、

「こんなの魔法で解決すればいいんだよ。マジカル☆ミラクル☆ジュエルチェンジ！」

キラキラ輝く金色の羽が貝をくすぐると、貝の口が大きく開き、四つ目のジュエリーが出てきました。

「これは、友情を表す『フレンズトパーズ』だよ」

「やったー。これで四つのジュエリーがそろったね」

私たちが喜んでいると、

「あれ？ ジュエルがいない」

ジュエルの姿がどこにもありません。すると、どこからかジュエルの声がし、四つのジュエリーが空高く輝き始めました。

「あなたたち二人は、協力するやさしさ、冒険する勇気、かたい友情で結ばれ、これから先、大きな夢にむかっていけるでしょう。私はいつまでも二人の友達よ。忘れないでね」

空で輝いていた四つのジュエリーが二人をつつみ、ジュエルの声とともに消えていきました。